

米大統領たちの太平洋戦争

アイゼンハワーからブッシュまで、太平洋戦線・欧州戦線にみずから進んで身を投じた戦後の歴代米大統領たちの参戦記。

文・平岡洋一

はじめに

筆者が昨年（一九九四）八月に訪米したときに米国の国立公文書館入口ホールに、写真パネルが掲示され、歴代大統領が、どのように第二次大戦に参加して国家につくしたかを展示していた。

驚いたのは、戦後の大統領のうち、クリントンとは別として、アイゼンハワーからブッシュまでの、八人すべてが、みずから進んで軍務につくことを望み、そのうち七人までが欧州戦線および太平洋戦争に、何らかの形で軍人として参加していたことであつた。

アイゼンハワー陸軍中尉はヨーロッパ派遣軍司令官として、ケネディ海軍中尉は魚雷艇長として、ジョンソン海軍少佐は海軍省の幕僚、ニクソン海軍少佐は航空部隊の補給士官、フォード海軍少佐は艦隊の補給士官、レーガン陸軍大尉は補給士官、ついで陸軍航空隊教育宣伝部の士気高揚映画の俳優として、ブッシュ海軍中尉はTBFアヴェンジャー雷撃機のパイロットとして、それぞれが太平洋戦争に参加していた。以下戦後に就任した大統領がどのような形で第二次大戦に参加し、戦

つたかを明らかにしてみた。

太平洋を泳がされた大統領

ブッシュ元大統領

戦後の歴代大統領のなかで、太平洋戦争にいちばん劇的な戦いをしたと日本で考えられているのは、日本の駆逐艦「ソロモン」海で撃沈された魚雷艇長のジョン・F・ケネディ海軍中尉であるが、戦争中にもつと劇的な活躍をし、生死の間を往復し、太平洋を二回も泳いだのは第四代大統領のジョージ・H・W・ブッシュ海軍中尉であつた。また、ブッシュは入隊時一八歳という、当時の米海軍で最年少の戦士でもあつた。

ブッシュ少年（当時一七歳）は、日本軍の真珠湾攻撃のニュースや、「二隻たりとも多くの艦艇を必要とし、一門たりとも多くの大砲を必要とし、一人たりとも多くの人手を必要とする。今や猶予すべき一秒の時間なし。海軍よ奮起せよ」と海軍長官ノックスが全海軍に電報を発したとのニュースを聞き、家族に無断で海軍航空隊への入隊を決意し、登録してしまつた。

ブッシュ家は裕福な名門であり、ときの国

務長官スチムソンとも親しい間柄であつたため、父や家族はスチムソン國務長官とともにブッシュ少年に、とにかく大学を卒業してから入隊することを勧めた。

しかし、ブッシュ少年は一八歳の誕生日を迎えた一九四二年（昭和十七）六月二二日に海軍に入隊してしまつた。そして、一〇か月の基本飛行訓練を受け、一九歳の誕生日直前の五月二八日に、パイロットの資格を得て海軍少尉に任官した。次に、空母搭載機が陸上航空機が、戦闘機が雷撃機が雷撃機などの選択をすることになったが、ブッシュ少尉は、艦載機として当時いちばん大きく、操縦は難しいが、開発されたばかりの最新鋭機で、もっとも期待されていたグラマンTBFアヴェンジャー雷撃機を選んだ。

彼は上級飛行訓練中に車輪が出なくて胴体着陸をし、機体を破損させたりしたが、一九四三年にはぶじに訓練を終えて第五一雷撃飛行隊に補職され、インペンドENS級空母のサンジャントに配属された。

ブッシュ少尉は空母に配属されてからも着艦に失敗して一機を破損させたが、アヴェンジャー雷撃機のババ号（ブッシュ少尉のフィアンセの名前）の後大統領夫人に搭乗し、マリアナ沖海戦、ペリリュー島、父島、フィリピン空襲など中部太平洋の諸作戦に五回出撃した。

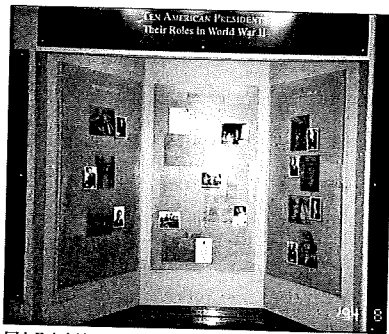
この間、マリアナ沖海戦と父島空襲時に墜落し、二回も太平洋を泳いだ。一度目は、一九四四年六月一九日のマリアナ沖海戦中、このときは上右直衝機として警戒に当たつて

いたが、日本機空襲が始まる直前にエンジンが故障し不時着水、駆逐艦のクラレンスR・ブロンソンに救助された。

その後、中尉に進級しパラオやペリリュー島の爆撃に参加したが、二〇歳の誕生日を迎えた二か月の九月二日、父島の日本海軍の通信所の爆撃を命じられ、爆撃行動に入ったところを振分山に配備されていた海軍特別根拠地隊第四分隊の二五ミリ連装機銃により対空射撃をたびたび、被弾し火災が起きると、ブッシュ中尉は航法士業務の射撃手ホワイト中尉と通信員のデラニー二等下士官に脱出を命じた。しかし、ひとりではパラシュートが開かず、他のひとりではパラシュートは開いたが行方不明となつてしまつた。一方、ブッシュ中尉はふたりの脱出後にパラシュート降下し、尾翼で頭を打撲したが、ぶじに着水し、救助のために父島東方に配備されていた潜水艦フインバックに救助された。

救助されたブッシュ中尉は一か月を潜水艦で過ごし母艦に帰還したが、そこでブッシュ中尉を迎えたのは「さあ、また出かけよう。ジョージ」と書かれた生還を祝うデコレーション・ケーキであつた。そして、ブッシュ中尉は再び操縦桿を握り、一月にはマリナ湾の爆撃に参加した後、母艦に修理の必要が生じたため帰国した。修理を終えた空母サンジャントと第五一雷撃飛行隊は、計画によれば一九四五年八月には再び日本本土空襲を行なう予定であつた。しかし、日本が降伏したため出撃は取りやめられた。

復員するとブッシュ中尉はフィアンセであ



国立公文書館の入口ホールの戦後歴代米大統領のパネル。



フォード元大統領のコーナー。艦上体育風景の写真が展示されている。



同じくブッシュ元大統領。海軍航空隊入隊直後のものらしい写真が展示されている。



第51雷撃飛行隊のアヴェンジャー雷撃機の編隊。右端の位置がブッシュ機。



訓練を終えて、パイロットとして海軍第51雷撃飛行隊に配属されたころのジョージ・ブッシュ少尉。



英雄的行為によりルーズヴェルト大統領からブッシュ少尉に授与された「航空殊勲章」。

*航空殊勲章=Distinguished Flying Cross. *黄金の翼=Navy Gold Wing. *航空殊勲章(海軍)=Air Medal with three oak leaf cluster.

無人島に泳ぎ着いてから救助を求めて島から島へと泳いでおり、太平洋をもっとも長時間泳いだ大統領といえるであろう。

ケネディ中尉は、太平洋戦争が勃発したとき、ハーバード大学卒業後であったが、ただちに海軍に志願し少尉に任命された。二四歳であった。基礎訓練を終えたケネディ中尉は一九四三年(昭和一八)中期に、魚雷艇PT-109の艇長として二名の乗員とともに南太平洋のソロモン諸島に進出し、日本軍のガダルカナルへの海上輸送を阻止する哨戒作戦に従事していた。

一方、ケネディ中尉の魚雷艇を撃沈した駆逐艦大霧は、一九四三年七月二日、ブインからコロンバンガラ島へ陸軍部隊を輸送する船団の護衛任務に従事していた。その帰路の八月二日午前二時ごろ、右前方一〇〇〇メートルに魚雷艇を発見した。しかし、射撃するには近すぎたため、艦長の花見弘平少佐は衝突させて撃沈することを決意し、三二ノットに増速するとともに艦を魚雷艇に向首した。衝突の瞬間、魚雷艇は轟音とともに二つに割れ、火を噴きつつ大霧の両舷をこすりながら艦尾付近で沈んだようであった。大霧は衝撃をほとんど感じなかったと花見艦長は後に回想している。

ケネディ中尉のほうも駆逐艦を発見したが、発見が遅かったためか、未熟なためか、なんら回避行動をとることなく衝突してしまった。衝突で艇体は二つに裂かれ、エンジンのある艇尾部分は沈み、二名が死亡し六名(うち二名は負傷)が海中に放り出された。

ケネディ中尉の乗っていた艇首部分は浮いていたが、彼は甲板に投げ付けられ、「気の遠くなるほど背中を打った」という。

起き上がったケネディ艦長は、放り出された部下を救助するため海中に入り、次つぎと負傷した部下を引き上げた。しかし、間もなく艇首部分も沈んでしまった。負傷者が流されないように救命胴衣の紐をたがいに結び、一団となって一〇時間近く漂流の後、遠方に珊瑚礁が見えてきたので、ケネディ中尉は負傷者の救命胴衣の紐を口にくわえて五時間ほど泳ぎ、かろうじて珊瑚礁にたどり着いた。だが、泳ぎ着いた珊瑚礁には食料も水もなく、このままでは衰弱してしまおうと考えられたため、もつと大きな珊瑚礁に行けば、どこかに人も住んでいるであろうと、泳ぎの上手な部下のひとりを連れて隣の大きな珊瑚礁まで泳いだ。

そこで島民を発見し、「ケネディ中尉以下二名の救助を頼む」とヤシの実にナイフで書き、さらに隣の島に配備されていたニュージーランドの沿岸監視隊に渡すよう依頼し、このメッセージを見た沿岸監視隊の通報によりようやく彼は救助された。

しかし、ケネディ中尉一行が帰還したときには、彼らは戦死したものと判断され、部隊葬が終わっていた。

その後、ケネディ中尉には、ハルゼー提督から「勇氣と忍耐と優秀な指導力が部下の命を救った」との感状が、また、海軍からは「海軍・海兵隊メダル」と「紫勳章」が贈られた。

四月九日には、現役として召集された。しかし、視力不足から第一線勤務は不適とされ、サンフランシスコで船舶へ物資を搭載する物資搭載官に補職された。

このレーガン中尉を土気高揚のドラマや、陸軍が製作する教育訓練映画「ハリウッド」が製作する宣伝映画の俳優として活用することに目をつけたのが、陸軍航空隊だった。レーガン中尉は以後、陸軍の教育映画やハリウッド製の戦意高揚映画である「これが陸軍だ」「我が愛は空へ」「戦場を駆ける男」などに出演し、戦争が終わった一九四五年二月に陸軍大尉で除隊した。

〈ジョンソン元大統領〉

次が変わっているのは、議員でありながら海軍に応募し、わずか一回の爆撃機による出動(それも視察)で、呼び返され復員させられたリンドン・B・ジョンソン海軍少佐である。

ジョンソンは一九三七年に捕欠ではあったがテキサス州の下院議員に選出されていた。しかし戦乱が迫った一九四〇年に議員のまま海軍を志願し、予備役海軍少佐に登録された。太平洋戦争開戦とともに召集され、ハワイ奇襲の三日後にワシントンの海軍省に着任した。以後、ジョンソン少佐は基礎教育終了後、海軍作戦部の参謀として勤務していたが、一九四二年六月、南太平洋方面の戦況調査のためオーストラリアとニュージーランドに派遣された。

オーストラリアに着くとジョンソン少佐は

戦争の実情を知るべきであると、マッカーサー大将に願ひで、六月九日にオーストラリアのタウンズビルからニューギニアのラエ爆撃に向かう第三爆撃隊のB26爆撃機に同乗を許可された。しかし、この爆撃隊は、途中で日本の撃墜王坂井三郎などの零戦隊の迎撃にあい、一機が撃墜され、一機が被害を受けポートモレスビーに着陸時に大破炎上してしまった。一方、ジョンソン少佐の乗ったB26は、発電機の故障のため、進撃途中で修理のために中継基地であるポートモレスビーに着陸し難をのがれた。しかし、修理を終え翌日タウンズビルに帰投したジョンソン少佐を待っていたのは、議員は戦間に従事すべきでないとの大統領命令であった。このためジョンソン少佐はただちにワシントンに帰り七月一日に除隊した。

その他の大統領

〈アイゼンハワー元大統領〉

本稿に登場する元大統領のなかで最初から職業軍人だったのは、ジミー・E・カーター海軍兵学校生徒とヨーロッパ派遣軍司令官のドワイト・D・アイゼンハワー中将である。

しかし、カーターの場合は、乗艦実習中カリブ海の作戦に参加したものの海軍兵学校を卒業する前に戦争が終わってしまったため、本格的に戦争に参加することはなかった。一方、アイゼンハワーは第二次大戦に参加した大統領中、最年長者かつ最高の階級で、開戦時、陸軍中将であった。



1962年9月、先輩大統領であるアイゼンハワーと歓談するケネディ大統領(左)。

変わり種の軍務について大統領

〈レーガン元大統領〉

第二次大戦中に軍務について大統領で、変わった任務についていたのは映画俳優として軍務についたロナルド・W・レーガン陸軍大尉であろう。

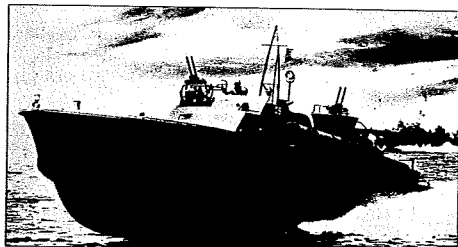
レーガンは一九三七年(昭和一二)以降、ハリウッドで映画俳優になっていたが、ユレカ大学在学中から通信教育を利用して一九三七年五月五日陸軍中尉の資格を得て、予備役として第三騎兵連隊に登録されていた。そして、太平洋戦争が始まった一九四二年



ニューギニアのポートモレスビー基地におけるジョンソン少佐(左端)。



レーガン元大統領とナンシー夫人。戦時中、レーガン中尉は多くの戦意高揚映画に出演した。



ケネディ中尉が艇長として搭乗していた魚雷艇PT-109。駆逐艦大霧に衝突されて沈没した。

ヨーロッパ方面連合軍最高司令官に任命された。一九四四年六月六日にはノルマンディー上陸作戦を成功させ、ヒトラーの支配からヨーロッパを解放した。

この実績や功績から戦後にNATO軍が編成されると、NATO軍の最高司令官に任命され元帥で退官し、一九四八年にはコロンビア大学の総長に迎えられた。その後、請われて一九五二年には大統領選挙に出馬し、一九五三年一月から一九六一年まで、二期大統領を務めた。アイゼンハワーは軍人から大学総長、そして大統領と、日本では考えられない変身をとげた大統領であった。

ヘフォード元大統領

ブッシュ元大統領と同じく太平洋戦争中に海軍航空部隊に勤務したのはジェラルド・R・フォード海軍少佐である。軍務経験のある戦後に登壇した七名の元大統領中、もっとも長期開戦任務につきながら幸運に恵まれて撃墜されることもなかった。しかし、航法士という地味な職域のためか、あまり目立った戦績もない。

フォードはエール大学法学部を一九四二年に卒業し、故郷で弁護士を開業していた。しかし、ハワイ奇襲のニュースを聞きやたらに海軍に応募し、一九四二年四月に入隊。海軍中尉に任命された。パイロットを希望し海軍飛行学校で操縦訓練を受けるが失格。やむなく航法士となり艦爆搭乗員として空母モンレーに乗艦。比島沖海戦(レイテ沖海戦)から沖縄上陸作戦、終戦直前の本州・北海道

方面の爆撃作戦に参加し、一九四六年に海軍少佐で除隊した。

ニコソン元大統領

第三七代大統領のリチャード・M・ニコソン海軍中尉にも華々しい戦歴はない。

ニコソンはデューク大学法学部を一九四〇年に卒業し、結婚して郷里で法律関係の仕事をしてきた。しかし彼もまた、ハワイ奇襲のニュースを聞きやたらに海軍を志願し、予備中尉として南太平洋方面の航空輸送補給関係の業務を行なうこととなった。そして、一九四三年六月から一九四四年二月まで、米軍の進撃にたいがい太平洋の島から島へと補給調整連絡官として派遣され、戦争が終わった半年後の一九四六年一月に海軍少佐として復員した。

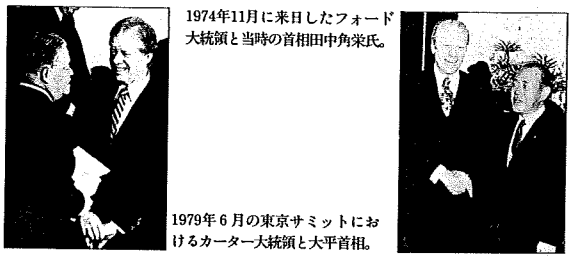
日米大学生の空中戦

日本の大学生——昭和十八年(一九四三)九月に東條英機首相によって学生が学業を打ち切られ、敗色濃い戦場に投入された——との映画「さけ、わだつみの声」の広告文のいわゆる動員生徒の日本の大学生と、みずから志願した米国の大学生とが激突したのがマリアナ沖海戦であった。この海戦には日本の大学生が予備士官として数多く参加したが、戦いは日本側の完敗に終わった。その四か月後に特攻隊が生まれた。

日本の大学生は「国家の未来の柱」として徴兵を延期され学業に励むことを期待され、敗色濃厚となる開戦二年後の昭和十八



ノルマンディー上陸。アイゼンハワーは連合軍最高司令官をつとめ上陸作戦を成功させた。



1974年11月に来日したフォード大統領と当時の首相田中角栄氏。

1979年6月の東京サミットにおけるカーター大統領と大平首相。



1982年9月、田中元首相を訪問したニクソン元大統領。

は新婚早々であったがハワイ奇襲のニュースを聞きやたらに応募した。裕福なケネディ家もブッシュ家も、ともにケネディ家では男子のすべてが志願し、そのなかで長男のジョセフ・P・ケネディは戦死している。そして、長男のジョセフが戦死後、適齢期になった三男のロバート・ケネディは、ハーバード大学を一時休学し海軍に入隊した。

このように米国の大学生はエリート意識から、Noblesse Oblige(高貴な人や特権を有する人の義務)として、学業を一時放棄して銃をとり困難に当たっていた。

しかし、このときに「将来国家の柱となるべき」日本のエリートたる大学生は学業に励み、ときには「銀ブラ」を楽しんでいた。また、金持のなかには徴兵を逃れるために子息を大学に送っていた者もいたという。

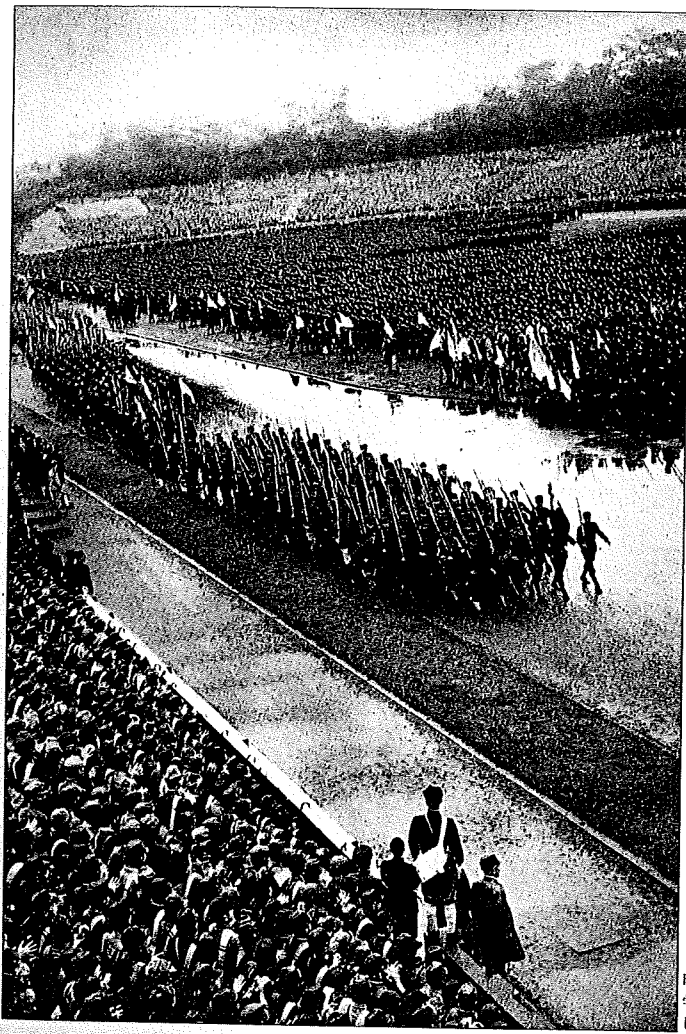
この日米の相違が日本の若者を特攻隊へと送り込ませた一因ともなったのである。というのは、日本の大学生が強制的に徴兵され、ごく短期間の訓練を受けただけで予備士官(少尉)として戦線に投入されたの比べ、米国の大学生たちはブッシュやケネディのように中尉に進級し、その間に充分な訓練を受け、戦塵をくり抜き抜けてヴェトナムの戦士となっていたからである。そして、米国のヴェトナム大学生と未熟な日本の大学生が衝突したのがマリアナ沖海戦であった。

この海戦の敗因には科学技術や物量の差もあったが、未熟な日本の大学生が操縦する飛行機は航法も未熟で、米艦隊を発見せず、さらに辛うじて上空に達した飛行機も、熟達

した米国の大学生のブッシュ中尉などに「七面鳥狩り」とやゆされるほど易々と撃墜されてしまったのであった。そして、この未熟な日本の大学生に米国の大学生と対等に戦う方法は特攻しか残されていなかったのである。

マリアナ沖海戦の四か月後に、第一航空艦隊司令官としてフィリピンに着任した大西瀧治郎中将は、赴任前に大本営を訪れ、最近の

米軍はレーダーを用い「空中待機の戦闘機で巧妙に攻撃してくるので、犠牲ばかり多く攻撃も困難になってきた。もはや第一線特攻兵の殉国の至誠に訴えて、必死必殺の体当たり攻撃しかない」と特攻作戦の許可を得ていた。そして、戦後に非合理・不条理と厳しく非難される特攻隊の出撃が始まったのであった。(ひらまうち・防衛大学校教授)



昭和十八年10月2日、理工系以外の学徒徴兵猶子が停止された。写真は同月21日の学徒出陣式の模様。